

四、職員組織

実に皮肉なことに保育室がたりなくて都合のよいこともある。前述の如く九時半から十一時迄の時間を除いては、だいたい一室に二組が活動しているため、教師は常に二人で二組を共同指導するような形になる。従って教師の組合せを考えると、経歴年数による指導力、老練さ、若さと熱意、また各々の特技ならびに個性をよく考慮して組織すると、互の長所を發揮し欠点を補いあい、実に妙味あるものとなった。

また出張、欠勤などのあった場合には人手不足の私の園では非常に助かっています。

幸いにして本園職員の和においては申し分なく、どの組合せの場合にもじゅうぶんな効果をあげることができました。私共は今後なお一層この環境で教育効果をあげるべく、研究を続けて参りたいと思っております。

◎計画通りに進めばまもなく市当局の尽力によって、新園舎建築に着手し、私共の悩みも解消されつつあるはずで

私たちの幼稚園

谷 野 外 子

私の園の研究

私たちの幼稚園——といっても一種のささやかなものだが。

園児数（一年保育の五才児）
男児二十三名 女児二十一名 計四十四

名 これらの園児の保育歴は次のとおりである。

保 育 歴			男	女	計
家庭から直接きたもの	11	1	12		
一年間幼稚園または保育所を経てきたもの	9	18	27		
一年以上幼稚園または保育所を経てきたもの	3	2	5		

なお家庭は大体インテリ層が多いといえる。当園は現在小学校と併設で、子どもたちはいつも小学生と接触する機会も多く、運動会、学芸会などは共催する関係上、自然にみようみまねで小学生の遊びもおぼえるなど、いろいろの影響をうけている。

現在の園舎は、去年の四月、数十年経た古い小学校の二教室をゆずりうけたもので、保育室と遊戯室とにあてているが、窓が高く、室内はうす暗く螢光灯を七灯入れている。下水道も完備していないため、雨の日は入口あたりに水がつくありさまでよい園舎とはいえない。保育室 十六坪、遊戯室 二十二坪で、四十四名の園児が生活

している。設備は決してよいとはいえないが、私たちはできるだけよい環境を作ろうと努力している。このような中でこの遊びをした明かるい子ども、温かい心で協力していく子ども、真剣に追求する子ども、そうした積極的な子どもになってほしいと思いつつ子どもに接している。そのためには子どもたちにじゅうぶんに遊ばせることが大切だと思ふ。子どもたちの遊びをそのまま放任せず、子どもたちの遊びをじゅうぶんに生かし、発展させみんなで一しょになつて楽しむ、一しょになつて何かを目指して進む、そのような状態を望んでいる。しかしそのような遊びをいつも子どもたちがしてくれるとはかぎらない。また子どもたちの遊びのままに興味のままにながれてはいけない。やはり、子どもの生活に則した保育計画を持ち、それをいかにして子どもたちの遊びの中にとり入れ誘導して、喜んで何事でもする態度、工夫、努力する態度を養い、子どもたちの内にある力を引き出し、完

成、成就の喜びを味わせるかということに努力しなければならぬと思う。そこで私たちは計画に基いた環境をじゅうぶんに用意し、その中に子どもと共にとけ込み、子どもの小さな動きやことばをも生かし欲求の満足感を与え常に新鮮な力強い経験の場の構成に努力している。こうした保育の場から楽しく展開された日をひろつてみた。

○五月二十二日

二眠の蚕を五十四程いただいた。「これ何?」と不思議そうな顔が集つてきた。それで平易に楽しく童話化して蚕への関心を誘つた。当番は喜んで園庭の桑の葉をとってくる。それから毎日のぞいたり、脱皮を喜んでだりしてだいに育てた。六月に入って蚕は目立つて大きくなり、子どもたちも、「蚕大きくなったね。」「もくもく葉をたべるね。」といいながら蚕の成長ぶりを眺め世話をしていた。十三日子どもたちが帰ったあとで蚕が二匹まゆを作りだしたので別の箱にわらを入れてうつした。次の朝、子ども

たちがみつけ「蚕巢作った。」「線みたい。」「と大騒ぎだった。次から次へと糸を出し蚕の体が次第にみえなくなっていくのを見て「蚕どこへいった。」「糸になってしまったか。」と聞くなど不思議で仕方がないといったようだった。全部まゆを作り終つた十八日、退園後熱湯につけ糸くりの準備をした。翌日そのまゆを十二、三個ずつ空カンに分け、割ばしで糸をたぐり出すと、子どもたちは大喜びで糸くりを始めた。中には二十米位いってもまだ切れず、廊下を曲つて更に十米位もくつたものもあつた。まいた糸は大切にかばんにしまい「これ、おかあさんあげる。」という子や、くつた糸をマジックインキで染め「これ、うちいってもの縫うわ。」という子もいて、みんな思う存分糸くりに楽しんだ。私たちは準備とこどもの発案を大切に扱ひ長期の観察を真剣な態度で終始楽しんで出来たことを喜んでいる。

●一方幼児の身近なもので興味深いもの――カタツムリの飼育をした。興味ある手近

かなものほぐんぐん飼育の関心が高まるので、食物や飼育ビンの清潔などに注意し、飼育に適当な数や世話に気をつけた。

○六月二十八日

降り続いた雨が上りカタツムリがいそうな天気になったので、うんと数をふやしカタツムリと思う存分遊びたいと思い、多くいそうな中学校の庭に出た。一人がみつけると、我も我もと探し、たちまち不足分のカタツムリを集めた。デンデン虫の歌を歌いながら意気揚々と園にもどりデンデン虫の歌や動きのリズムうずまぎ行進などした後一人一匹ずつを持ち競走させることにした。放射状に樺積木を置き最も狭い面積で全体の子どもの見通しや興味を考え、茹露で水をうった。「がんばれ!」「あっおまえの速いな。」「啓子ちゃんの一等や。」「ぼくのがもう少しや。」「わあ、勝った勝った二等や。」などと懸命になって応援したり喜んだり熱の入れようはたいへんであった。それから数日間子どもたちは思い思いに飼育ビ

ンからかたつむりをもち出して遊んだ。こうして蚕、かたつむりとじゅうぶんに親しみ、さなぎからかえった蝶を次々青空に帰したり、生みたてのあたたかい卵を順番に貰って得意になって帰っていく子どもたちは動物への関心も高まり、家や園庭から次々と小さな生物を持ち込み嬉しい悲鳴をあげることも多かった。飼育というある期間の中心的課題のなかで、一人ひとりが楽しみ、全体としてまとまりを持ちつつ、各保育内容及び美しい心情への培いが無理なく総合されて効果をみたと思われた。幼児の感受性に訴え空想性や想像性をのびし、道徳的な心情を培い、経験の範囲を豊かに広め、思考を徐々にすすめていくために視聴覚教材を多くとり入れるようにつとめている。

○九月二十四日

パンビの映画をみた。みんな大喜び。森の動物たちと遊んでいる場面、山火事のところ、おかあさんがいなくなるところなどが特に印象的のようだった。早速感想を話し

あったり絵を画いたり、空箱で森の動物やパンビの森を作ったり、積木でも動物をつくるなど子どもたちは映画の思い出を次から次へと表現していった。十月二日のこと、七、八名の子どもがパンビの話をしながらい絵を画いていたので、その一人K子の大きな画用紙一ぱいに画かれたパンビ親子の絵を「K子ちゃんのパンビもこの森に入れてあげましょうね。」といって保育室のうしろの広い壁に、動物がお月見をしている中にまぜてはった。するとまわりの子どもたちは「パンビのしっぽにちょうちょう止つとるがにしたらいいわ。」「大きい木作ろう。」「小鳥もおったね。」「こっちの方淋しいさげここにふくろうのうち作ったらいいわ。」「ぼく噴水作ろう。」などといいながら大はりきりで画き切っては壁にはった。」「あしたまた続きしようね。」と帰った子どもたち次々の日は新たな友が多く加わった。次第に賑かに変化していく森をみて子どもたちは歓声をあげた。三日目と同じく

繰返され「兎にまゆげある？」など楽しく話合いつつ映画に現れた動物や森の草木が作られた。S子が赤い鳥が巣箱に入っているのを作ると誰からもなく、「赤い鳥小鳥なぜなぜ赤い……。」と歌いだすなど、みんなでバンビの森づくりを楽しんだ。でき上った森を眺めて子どもたちは満足そうだった。

●幼児の自由遊びにおける創造性や自然の動きを集団の活動の中へ誘導し、共に楽しむ経験内容とし発展させたいと思っている園庭の藤、はじの葉が色づいて散りはじめた十月の下旬、子どもたちは落葉を拾ってきて日だまりでぞうりを作ったり、かばやき屋さんをしたりして遊んでいた。十一月に入っただいちょう、さくら、もみじもきれいに色づいたのでいろいろな葉を拾ってきて模様を作ったり、壁面のバンビの森も色づいた葉ととりかえたりしていたが、そうしたある日、十一月七日のこと。朝のうちは曇りがちで少し風のある日だった。子

どもたちは落葉を拾ってきて壁にはっぱの魚や舟を浮かべたり、風に吹かれる木の葉をみて「くるくるまいてくる。」といいながら追っかけたりしていた。それをそのまま発展させ落葉の歌や鬼あそびやリズム遊びをした。落葉のお話、何かにつかまってを聞いたあと、風に吹かれて舞っているはっぱを画き、その上に青いフィンガーカラーでフィンガーペインティングをした。「強い風だよ。」「くるくるまってるよ。」などといいつつ両腕を思いきりかきまわし風になりきって大喜びした。全員作品を作り、思わぬ出来ばえにうれしそうであった。

●劇あそびなどはストーリーにこだわったり幼児のことは見失ったり、みせるためのものであってはならないと思ひ、楽しく表現の中に身をおくことを望んでいる。

前夜からの雪が積り朝になってもまだ降りやまぬ十二月十九日、笠地藏の幻灯をした。見終るとY男が「劇したい。」といったので「ぼくお地藏さまになりたい。」「わた

しも。」「ぼくおじいさん。」などと大はしゃぎ。希望者が大勢なので代りあつてするところまで来た時「薪買う人おらん。」といいだしたので薪を買う人を一人きめた。「エーたきぎはいらんかねー。」「薪をください。」と自由に会話されたり、お地藏さまの雪を手ではらって笠をかぶせようとするとお地藏さまになった子どもがこらえきれずに笑いだす。すると「ありゃ、このお地藏さまわろうたぞ。」という。こうしてみんな喜んで劇遊びに参加し、自分のことばで場に応じた自由な話で運ばれていった。

●安心していろいろの経験をじゅうぶんに積むことができるようにと思ひ、豊かな材料の用意と共にピアノや電番なども自由に使用できる雰囲気につけています。

○十一月五日

五人でピアノを囲み積木の大きな家を作りますまごをしていた。そのうちJ子がピアノをひきだすとS子もE子も「次ひかし

表紙絵の鶏のこと

安 泰

表紙絵の鶏は、黒色オービントンという種類で、昔私が小学生の頃、茨城のいなかで飼っていたことのある当時として珍鶏だった。私は元来、軍鶏が好きで、母にせがんで雛分困らせたものだが、軍鶏はとも子どもには世話が出来ないし近所の鶏とケンカをするから、という理由で承知されなかった。その代りといって、父が町の鳥屋に頼んで取寄せたのが、この黒色オービントンである。私の欲しかったのは、がっちり引きしまった体と、鋭い目と、太い頑丈な脚をもっていて、国志の魂のような軍鶏だったのに、およそそれとは似つかぬ鶏を見せられて、めんくらってしまった。鳥屋は「この鶏の原産は外国で、つまり舶来の鶏で、めったにいないのだから」と、私の関心をこれに向けようとするのだが、私は内心こんな鶏なんかちっともよくねえや、と不満だった。けれどもこれを飼って十日も経たないうちに、すっかり好きになってしまった。全身黒光りする羽毛、真赤な鳥冠、堂々たる体軀、温和な性質、軍鶏とは全く異った魅力があって、私は子ども心に「おとなしくて、きれいでいい鶏だなあ」と思ったことを記憶している。産卵旺盛なおおかけを蒙って、一般に広く飼われている白レグのようなスマートなものではないが、丸く肥って白レグの倍もあるかと思われる親しみのもてる好漢である。

この子どもの頃に飼ったオービントンが忘れられなくて、東京でも学生時代に飼ってよく写生したのだが、今なお私の描く鶏はこれが多く登場してくる。去年の童画展の作品「ソップの「鶏とダイヤ」」にも、さしえカット類にも、この「幼児教育」の表紙もその一つである。この鶏の美しさは、全身真黒な羽毛と鳥冠の赤の対象にあるのだが、この表紙の場合、鳥冠だけに赤を塗るというわけにはいかない。どうやら印刷過程をふむ仕事内では、色の制約という不自由な檻の中からは終生遁れることは出来ないようである。

て。」とそばへいった。三人は何か相談していたがやがて五人でハンドカスター、タンブリン、すず、小太鼓をもち出した。E子が「先生、音楽会聞きにきて。音楽会です。みんな聞きにきてください。」といったのでまわりのこどもたちも集ってきていすに座りお客様になった。T男がタクトをふりピアノはS子で合奏が始った。「こんどはずず、太鼓はいかん、タンブリンもいかん。」と懸命に指揮した。ピアノは代ってE子、指揮はK子。お客様の子どもたちも楽器をもち合奏の仲間入りをした。そのうちにS子が「今から踊りするか。」「うんしやう。」とアレッキングのレコードをかけ二人ずつ手をつないで踊りだした。レコードをきいて集ってきた子どもたちも一しょになつておどりだした。後半をいろいろ工夫したり前半も三人、四人、大勢でするなど自由に考えておどり、みんなでフォークダンスを楽しんだ。さまざまの経験をしながら健かに育つてくれることを心から願う。